

蕭紅：魯迅先生の思い出（上）

— 翻訳と注釈 —

平 石 淑 子

中国黒龍江省哈爾濱近郊の町呼蘭出身の女性作家蕭紅（1911～42）は、自由な文学活動の地を求め、当時の夫、蕭軍と共に「満洲国」を脱出し、上海にやって来る。彼らの文学性を認め、彼らが上海の文壇に出るために手を貸し、その後もさまざまな面で後ろ盾となったのが魯迅であった。ここに訳出する文章は、蕭紅が魯迅の死（1937年10月）後、彼に関する思い出を記録したもので、1939年10月に書かれている。

魯迅先生の笑い声は朗らかだ。心の底から楽しんでおられる。誰かが何か面白いことを言うと、魯迅先生は煙草を取り落としそうになるくらいに笑われ、そしてしばしば咳き込まれる¹⁾。

魯迅先生はとても軽快に歩かれる。特に印象的なのは、帽子をつかんで頭に載せたかと思うと左足を前に出し、委細構わずといった工合に出て行かれる姿だ²⁾。

魯迅先生は他人^{ひと}の服装にはほとんど無頓着だ。「誰が何を着ていても、目に入らないのです……」とおっしゃる³⁾。

魯迅先生の病気が少し良くなり、椅子にもたれ、煙草をふかしておられたその日、私は目を引くような真っ赤な上衣、袖がゆったりしたの、を着ていた。

魯迅先生は、「蒸し暑くなってきましたね、もう梅雨だな」と言われた。先生は象牙の吸口に挿し込んだ煙草をもう一度しっかり押し込むと、他の話題に移られた⁴⁾。

許先生⁵⁾は家事に忙しく、走り回っておられ、やはり私の服に目を留めてはくださらない。

そこで私は「周先生⁶⁾、私の服はどうですか」と切り出した。

魯迅先生は上から下まで目をやって、「あまりきれいではありませんね」

そして少し間を置き、こう言われた。「あなたのスカートの配色は間違っています。赤い上衣が悪いというのではない、それぞれの色はどれもきれいですが、赤い上衣には赤いスカートを合わせるべきです。そうでなければ黒いスカートですね。茶色はいかん。この二色を一緒にすると濁ってしまう……外国人が町を歩いているのを見たことはありませんか。下に緑色のスカートをはいて、上に紫の上衣を着ている人なんて絶対にいませんよ。赤いスカートに白い上衣を着ているなんて人もね……」⁷⁾

魯迅先生は椅子の背にもたれながら私を眺められ、「あなたのスカートは茶色で、しかも格子

模様です。色はとてもくすんでいる。だから赤い服もきれいに見えないのです」

「……痩せた人は黒い服を着てはいけません。太った人は白い服を着ては駄目です。足の長い女性は黒い靴を履かなければいけないし、足が短ければ白い靴を履くべきです。格子模様の服は、太った人は着られません。でも横縞よりはましですね。横縞のを太った人が着ると、更に横に引っ張られて太った人が更に幅広になってしまう。太った人は縦縞が良い。縦縞は人を細く見せますからね。横縞は人を太って見せるのです……」

その日魯迅先生はとても興が乗って、私の編み上げ靴にも少し注文を付けられた。私の靴は軍人が履くものなので、靴の前後にそれぞれ布製の引き手がついているのだが、この引き手は魯迅先生によるとズボンの中に入れるものなのだという⁸⁾……

「周先生、あの靴はずっと履いていましたのに、どうして教えてくださらなかったのですか。どうして今になって思い出されたのですか。今もう履いていませんのに。私が履いているのはもうほかの靴ではありませんか」と私は言った。

「あなたが履かなくなったから言うのですよ。履いている時に私がそう言ったら、あなたは履かなくなるでしょう」

その日の午後は宴会に行くため、許先生に布か絹の紐で髪を結わえてくださいとお願いした。許先生はクリーム色のや緑色、ピンクのも持って来られた。私と許先生と一緒に選んだのはクリーム色のだった。きれいに見せようと、許先生はそのピンク色のを取って私の髪に置かれ、そしてとても嬉しそうにこう言われた。

「素敵だわ！とってもきれい！」

私もとてもいい気分になって、行儀良く、また茶目っ気たっぷりに、魯迅先生がこちらを、私たちを御覧になるのを待った。

が、魯迅先生は一目見るなり、表情を険しくされた。先生は薄目使いに、私たちの方をご覧になった⁹⁾。

「この人をそんな風に着飾らせてはいけない……」

許先生はちょっと困っておられた。

私もおとなしくなった。

魯迅先生が北平で教壇に立っておられた時¹⁰⁾、かんしゃくを起こされたことはなかったが、よくこのような目でご覧になったと、許先生は常々私に話しておられた。許先生が女子師範大学の学生だった時、周先生は教室で、気分を害するとすぐ薄目使いになり、さっと学生たちを一瞥された。このような眼光について、魯迅先生はご自身で、范愛農先生のことを書いた文の中で語っておられるが¹¹⁾、このような眼光の人に出会えば誰でも、ある時代の全知者に詰め寄られているように感じるに違いない。

私は質問を始めた。「周先生はどうして女性の着る服のことがおわかりになるのですか」

「本で読んだことがあるのです、美学の……」

「いつお読みになったのですか……」

「たぶん日本で勉強していた時です……」

「買われたのですか」

「買ったとは限りません、たぶんどこかから持って来て読んだのです……」

「面白かったですか」

「ばらばらと読んだのですよ……」

「周先生は何のためにその本を読まれたのですか」

「……」 答えはなかった。多分答えにくかったのだろう。

許先生が傍から、「周先生は何でも読まれますからね」と言われた。

魯迅先生の家にお邪魔するのに、初めの頃はフランス租界から虹口まで、電車に乗って一時間ぐらいかかった¹²⁾。だからその頃は何う回数も割合少なかった。ある日、夜中まで話し込んだことがあった。12時を過ぎると電車がなくなってしまう。でもその日は何を話していたのか、切りの良いところで傍の小さな机に置かれた丸い時計を見るのだが、11時半になり、11時45分になり、とうとう電車がなくなってしまった¹³⁾。

「どのみちもう12時で、電車もないのですから、もう少しいいでしょう」と許先生が勧めてくださった。

魯迅先生は話の中から何かを連想されたかのように、象牙の吸口を手に静かに考え込んでおられた¹⁴⁾。

1時を回り、私（ほかにも友人がいた¹⁵⁾）を送って出られたのは許先生だった。外はしとしとと小雨が降っており、路地の灯りは皆消えていた。魯迅先生がきつとタクシーに乗せて返すようにと許先生に言われたのだろう。そして許先生にタクシー代を払うようにと言われたに違いない。

その後私も北四川路に住むようになると、毎晩夕食がすんだあと決まって大陸新村に通うようになった。風の日も、雨の日も、ほとんど間を置くことはなかった¹⁶⁾。

魯迅先生は北方の味を好まれた。特に揚げものや菌ごたえのあるものがお好きだった¹⁷⁾。のちに病気になられても、牛乳はあまり飲もうとされなかった。鳥のスープをそばに運ぶが、レンジで一口二口すすればそれでおしまいだった。

ある日、私は餃子を作りに行く約束をしていた。まだフランス租界に住んでいたので、外国の漬け物や肉挽き器にかけた牛肉を持って行き、許先生と一緒に客間の奥の四角い机で作り始めた。海嬰坊ちゃん¹⁸⁾が周りで騒いでいたが、ちょっとしたすきに丸くつぶした種をさらって行ってしまった。船を作ったと言って私たちに見せに来た。取り合わずにいと、また向こうへ行行って鶏を作っている。許先生も私も取り合わずにいた。彼の努力に対しては賛美せずにはいられなかったが、ひとたび賛美すれば、彼はより張り切ってしまうだろうから。

客間の奥は、黄昏が訪れるより先に暗くなった。背中が少しひんやりする。一枚羽織りたいと思ったが、忙しくてその暇もない。餃子を作り終わって数えてみるとさほど多くない。そこで初めて、許先生とおしゃべりが過ぎて、仕事が疎かになっていたことに気づいた。許先生がどうやって家を離れたか、どうやって天津で学ぶようになったか、女師大の学生だった時、どうやって家庭教師になったか。許先生が家庭教師に合格した時の話はとても面白かった。一人しか採用されないのに、何十人も応募してきたのだ。許先生が選ばれるかどうかは難しかった。少しでも学費の足しにしたいと思われたのだ。冬が来れば北平は寒いし、家は学校から遠いし、毎月、交通費のほかに、風邪でも引こうものなら自分でアスピリンを買う費用を出さなければならない。毎月10元の給料で西城から東城まで行くのだ……¹⁹⁾。

餃子がゆであがり、階段を上がっていくと、二階の魯迅先生の朗らかな笑い声が階段を飛び下りてきた。何人かの友人が上で賑やかに話をしているところだったのだ。その日はとても楽しい食事だった。

その後、私はまた韭菜合子を作ったり、荷葉餅を作ったりした²⁰⁾。私が提案すると魯迅先生は必ず賛成される。それにうまく作れなくても、魯迅先生はまだテーブルで箸を手に、許先生にこう尋ねられた。「もう少し食べてもいいかな」

魯迅先生は胃があまり丈夫ではなかったから、毎食後必ず「脾胃自美」を二粒飲まれた²¹⁾。

ある日の午後、魯迅先生が瞿秋白の「海上述林」の校正をされているところだった²²⁾。私が寝室に入っていくと、丸い回転椅子に座っておられた魯迅先生はこちらに向きを変え、私に向かって少し腰を浮かされた。

「久しぶり、久しぶり」そう言いながら私に会釈をされた。

さっき伺ったばかりではないですか。どうして久しぶりなんですか。午前中に伺った時のことを周先生はお忘れなんですね、でも私は毎日お邪魔しているのですよ……どうして全部忘れてしまわれたのですか。

周先生はくると背を向けて寝椅子に移られ、初めて笑い出された。からかっておられたのだ。

梅雨の季節はほとんど晴れる日がない。ある日の午前、やっと晴れたので、私は嬉しくなって、魯迅先生の家に行った。二階に駆け上がったので息が切れる。魯迅先生が「やあ！」と言われ、私が「はい！」と答える²³⁾。

私は息が切れてお茶も飲めないほどだ。

魯迅先生が尋ねられる。

「何かあったのですか」

私はこう答える、「晴れたんです、太陽が出ました」

許先生と魯迅先生と一緒に笑い出された。憂鬱な気持ちを突き破ることへの、とびきり理解ある笑いだった。

海嬰は私を見るといつも庭に連れて行って一緒に遊ぶと言って聞かない。私の髪を引っ張ったり、服を引っ張ったりする。

彼はどうして他の人を引っ張らないのだろう。周先生によれば、「あの子はあなたのお下げを見て、自分とあまり変わらないと思うのですよ。ほかの人たちは彼には皆大人に見えるのですが、あなたは子どもに見える」

許先生が海嬰に「どうしてこの人が好きなの、他の人は嫌いなのか」と聞かれる。

「お下げだから」そう言いながら私の髪を引っ張ろうとする。

魯迅先生の家は客が少ない。ほとんど無いといってよい²⁴⁾。特に居候している人は全くいない。ある土曜の夜、二階の魯迅先生の寝室に夕食を運び、テーブルをぎっしりと人が囲んだ。土曜日の夜はいつもこうだった。周建人先生は一家を連れておいでになる²⁵⁾。テーブルに着いた、痩せて背の高い、中国式の小さなチョッキを着た人を、魯迅先生はこう紹介された。「こちらは同郷の方で、商人です」²⁶⁾

初めて会うというのは恐らく正しい。中国式のズボンをはき、髪は短く刈り上げている。食事

の時、彼は人に酒を勧め、私にも注いでくれた。とても澆刺として、あまり商人には見えない。食事が終わると、また「偽自由書」や「二心集」²⁷⁾の話になった。その商人は考えがとても進歩的で、中国ではほとんど見ないタイプだった。会ったことがない人にはあまり心を開けない。

次の時は一階の客間の奥の四角いテーブルで夕食を食べた。その日はとても天気がよく、熱い風が吹き込んでいた。夕暮れ時だというのに、客間の奥はまだ暗くなっていなかった。魯迅先生は散髪されたばかりだった。それからテーブルには一皿の黄花魚²⁸⁾があったように記憶している。恐らく魯迅先生の口に合わせてだろう、油で焼いてあった。魯迅先生の前には酒を注いだ椀が置いてある。椀は平べったくて、ご飯を食べるときのお茶碗のようだった²⁹⁾。件の商人先生もいける口で、酒瓶は彼の側に置かれていた。彼は蒙古人がどうの、苗族の人がどうの、と話していた。チベットを通った時のこと、チベットの女性は、自分を追いかけてくる男性を見るとどんなふうにするか、とか。

この商人は本当に怪しい。あちこち出かけてばかりいて、どうして商売をしないのだろう。しかも魯迅先生の本を彼は全部読んでいて、この作品について話したかと思えば、次はあの作品を話題にする。しかも海嬰は彼を×先生と呼んでいる。私はその×というのを聞いてすぐ彼が誰だかわかった。×先生はしょっちゅう遅くに戻ってくる。魯迅先生の家から帰る時、路地で何度か顔を合わせた。

ある日の夜、×先生が三階から下りてきた。手に小さなトランクを掲げ、長袍子を着ている。魯迅先生の前に立ち、引越しをしようと言う。彼が挨拶をすませると、許先生が下まで送って行かれた。この時周先生は床をぐるぐる回りながら、私にこう尋ねられた。

「あなたは彼が商人だと思いますか」

「はい」と私は答えた。

魯迅先生は意味ありげに何歩か歩かれ、それからこう言われた。「あの人は禁制品を売っているのですよ、精神上のね……」

×先生は二万五千里を歩いて戻ってきたのだった。

若い者は手紙の書き方がぞんざいで、魯迅先生の頭痛の種である。

「字はうまく書かなければならないということはないが、人が読んでわかるようにしなければなりません。今の若い人は皆忙しすぎる……慌てて書き散らすから、他の人は何度読んでもわからない。それにどれほど時間がかかろうが、お構いなしです。どうせかかったこの時間は彼のものではないのですからね。こういう了見はあまりよろしくない」

しかし先生はやはり、あちらこちらから届く若者の手紙を一通一通開けて読んでおられる。目が役に立たなくなると、眼鏡をかけてご覧になる。しょっちゅう夜が更ける頃まで読んでおられる³⁰⁾。

魯迅先生は××映画館の二階の二列目に座られる。映画の題名は忘れてしまった。ニュース映画はソ連のメーデーを記念する赤の広場だった。

「私はこれを見ることはできないでしょう……あなたたちは将来見ることができるでしょうが」。魯迅先生は私たち周りの者にそう言われた³¹⁾。

コルヴィッツの作品に、魯迅先生は最も感銘を受けておられた。また彼女の人となりにも感銘を受けておられた。コルヴィッツはヒトラーの迫害を受け、教えることも、絵を描くことも許されなかったのだ。魯迅先生はよく彼女のことを話題にされた³²⁾。

ス McDレーのことも、魯迅先生はよく話題にされた。彼女はアメリカの女性で、インドの独立運動を援助し、今はまた中国を援助している³³⁾。

魯迅先生は映画を見に行くよう勧められた。「夏伯陽」とか「復讐艶遇」とか……そのほかには「人猿泰山」とか……或いはアフリカの珍しい獣の映像のようなものを、よく勧めておられた³⁴⁾。魯迅先生は「いいところは特にありませんが、鳥や獣などを見ると、動物に対する知識をそこそこ増やすことができます」と言われた³⁵⁾。

魯迅先生は公園には行かれない。上海に十年も住んでおられるのに、兆豊公園にも行かれたことがない。虹口公園みたいに近いところにも行かれたことがない³⁶⁾。春が来ると、私はいつも周先生に申し上げたものだ。公園の土は軟らかくて、公園を吹く風がどれほど優しいかを。周先生は、天気の良い日なら、日曜日で海嬰の休みの日なら、行けますね、タクシーに乗ってまっすぐ兆豊公園まで行けば、ちょっとした小旅行ですね、と応じられた。しかしこれは思っておられるだけでまだ実現されたことはない。しかも公園に定義を下される。魯迅先生はこのようにおっしゃる。「公園の様子は知っています……門を入ると二本の道がある、一本は左に、もう一本は右に行く、道沿いに柳の木や何かが植えてあって、木の下にはベンチがいくつか置いてある、もう少し先には池がある」

私は兆豊公園にも行ったことがあるし、虹口公園やフランス公園³⁷⁾にも行ったことがあるが、こういった定義はどんな国の公園設計にも当てはまるのではないだろうか。

魯迅先生は手袋をされないし、マフラーもされない。冬は濃紺³⁸⁾の木綿の長衣を着て、グレーのフェルト帽を被り、ゴム底の黒い帆布の靴を履いておられる³⁹⁾。

ゴム底の靴は、夏はとても暑く、冬はひんやりして湿気がこもる。魯迅先生のお体はあまり丈夫ではなかったから、皆はその靴を他の物に換えるようお勧めした。しかし魯迅先生はうんとおっしゃらない。ゴム底の靴は歩きやすいとおっしゃるのだ。

「周先生は一日にどれほど歩かれるのですか。せいぜい角を曲がって×××書店⁴⁰⁾に行くぐらいではありませんか」

魯迅先生は笑って答えられない。

「周先生はよく風邪を引かれるではないですか。マフラーをしないでいると、ちょっとでも風が吹けばあっという間に風邪を引いてしまうでしょう」

魯迅先生はこういったことがどれも習慣にないのだ。先生はこう言われる。

「小さい頃から手袋やマフラーをしなかったので、慣れないのです」

魯迅先生はドアを開けて家から出る時、両手は外に出したまま、袖口の寛い服を着て、風に向かって歩いて行かれる。脇には黒い縹子の、模様のある風呂敷包みを抱えておられる⁴¹⁾。中身は本かまたは手紙だ。老靶子路の本屋に行かれるのだ⁴²⁾。

その風呂敷包みは、毎日の外出の度に必ず持って行かれるし、戻る時も必ず持って戻られる。行きは若者たちの手紙を持ち、帰りはまた新しい手紙や若者たちが魯迅先生に見ていただくこと

する原稿を本屋から持ち帰られるのだ。

魯迅先生が模様の風呂敷包みを抱えて戻られる。傘も持っておられる。客間に入ると、そこにはもう客が待っている。傘を衣掛けに掛け、客と話を始められる。話が長くなると、傘の水滴が骨を伝って床に水たまりを作っている。

魯迅先生は二階に煙草を取りに行かれる。風呂敷包みを抱え、傘も忘れずに、ついでに二階に持って上がられる。

魯迅先生の記憶力はすばらしい。これまで先生の荷物が適当に置かれたことはない⁴³⁾。魯迅先生は北の味がお好きだ。許先生は北方出身のコックを雇おうとされたが、魯迅先生が出費がかさむと考えられ、雇うことができなかった。男性の使用人なら、少なくとも15元は必要だから。

だから米や炭を買うのは全部許先生の仕事だ。許先生に伺ったことがある。二人の女性の使用人はどうしてどちらも年寄りなのか、どちらも6、70歳なのかと。許先生は、彼女たちはよく心得ているからと言われた。海嬰のばあやは、海嬰が数ヶ月の時からここにいる⁴⁴⁾。

ちょうどその時、件の背の低い太ったばあやが階段を下りてきて、私たちと鉢合わせをした。

「先生、お茶がまだだったかね」、彼女は急いで湯飲みを出してお茶を入れてくれた。階段を下りた直後の荒い息づかいが、まだどの奥でグルグルいていた。彼女は確かに歳を取っていた。

客があると、許先生は必ず台所に入られる。料理はとてもたくさん。魚や、肉や……どれも皆大きな食器に盛られている。少なくとも四、五種類、多ければ七、八種類だ。だが普段は三種類だけ。エンドウ豆の豆苗を炒めたもの、タケノコの塩炒め、それから黄花魚⁴⁵⁾だ。

これほどシンプルなものはない。

魯迅先生の原稿が、拉都路の油条屋で油条を包むのに使われていた。私が手に入れた一枚は「死せる魂」の翻訳原稿だった。それを手紙で魯迅先生に報告した⁴⁶⁾。魯迅先生は珍しいこととも思われなかったようだが、許先生はとても腹を立てておられた。

魯迅先生が本を出された時の校正刷りは全部、机を拭いたり何なりに使われていた。客を呼んで家で食事をする時など、魯迅先生は途中で校正刷りを取りに行かれ、皆に配られる。受け取って一目見れば、どうして使えるわけがない。だが魯迅先生はこう言われる。

「お使いなさい。鶏を持って食べれば、手に油がつきますから」

風呂場に行っても、そこにも校正刷りが置いてあった。

許先生は朝から晩まで忙しかった。下で客の相手をしながら、手は編み物をしておられる。さもなければ話をしながら立ち上がり、鉢の枯れた葉を摘んでおられる。許先生は客を送る時はいつも、下の出口まで送られる。客のためにドアを開け、客が出て行くとそっとドアを閉めてまた二階に上がって来られる。

客があると町へ行って魚だの鶏だの買い、戻ると更に台所で作業だ。

魯迅先生が急に手紙を出すことになると、許先生が革靴に履き替え、郵便局か、大陸新村の近くのポストまで行かなければならない。雨の日は、傘をさして行かれる。

許先生は忙しい、許先生は楽しそうに笑われる、でも髪は少し白くなっている。

夜は映画を見に行く。施高搭路^{スコット}の車屋に車が一台しかない、魯迅先生は絶対に乗られず、必ず私たちを乗せられる。許先生、周建人夫人……海嬰、周建人先生の三人のお嬢さんたち。私たちは車に乗った。

魯迅先生と周建人先生、それから友人たち一人、二人は残られる。

映画を見終わって出て来ると、また一台しか車が来ない。魯迅先生はやはり絶対に乗ろうとさず、周建人先生の一家を乗せて先に帰らせる。

魯迅先生の脇を海嬰が歩き、蘇州河の大きな橋を越えて電車を待つ。二十分、三十分待っても電車は来ない。魯迅先生は蘇州河沿いの鉄の欄干を背に、橋のたもと石囲いに腰を下ろし、煙草を取り出して吸口を付け、悠然とふかしておられる。

海嬰が落ち着きなく行ったり来たり走り回っている、魯迅先生は自分の横に坐るようにと声を掛けられる。

魯迅先生の座っている姿は、田舎の静かな老人のようだ。

魯迅先生が飲まれるのは緑茶だ。ほかの飲み物は召し上がらない。コーヒー、ココア、牛乳、炭酸水など、家にも全く置いてない⁴⁷⁾。

魯迅先生は、客の相手をして夜が更けると、必ず客と一緒に夜食を召し上がる。そのビスケットは店で買ったもので、専用の箱に入っており、遅い時間になると許先生が小皿に載せて魯迅先生の書き物机に置く。食べ終わってしまうと、許先生は戸棚を開けてもう一皿分取り出される。それから向日葵の種も客がある度にほとんど欠かせない。魯迅先生は煙草をふかしながら皮をむいて口にされる。一皿食べてしまうと、魯迅先生は必ず許先生にもう一皿持ってくるようお命じになる⁴⁸⁾。

魯迅先生は二種類の煙草をいつも置いておられた。一つは高価なもので、一つは安いものだ。安い方は緑の缶で、私にはそれがどの銘柄かはわからない。煙草を吸う方の端に黄色い紙が巻いてあったのしか覚えていない。五十本入りで恐らく4角から5角だったと思う。これは魯迅先生が普段自分用に吸われるものだが、もう一つは白い缶の「前門」で、客に勧めるためのものだ。白い缶は魯迅先生の書き物机の引き出しにしまっていてある。客があると魯迅先生は下に下りて行かれるが、その時それを持って行かれる。客が帰ってしまうと、またそれを上まで持って来て、もとのように引き出しにしまわれる。緑の缶の方はずっと書き物机の上に置いてある。魯迅先生が好きな時に吸われるためだ⁴⁹⁾。

魯迅先生が休息なさる時は、ラジオも聞かず、散歩にも出ず、またベッドに横になって寝ることもしない。魯迅先生は自分でこうおっしゃる。

「椅子に座って本をめくるのが休息なのですよ」

魯迅先生は午後2時か3時頃から客の相手をされ、5時迄、6時迄、客がもし食事をしていくようなら、食事が済むと必ずまた一緒にお茶を飲まれる。お茶を飲み終わるとすぐ帰る人もいれば、帰らないうちにまた新しい客が来ることもある。そこでまた相手をし、8時になり、10時になり、しばしば12時になる。午後3時から夜の12時まで相手をされるのだ。こんなに長い間、魯

迅先生はずっと籐の寝椅子の上でひっきりなしに煙草を吸っておられる。

客が帰るともう深夜だ。本来はもう寝る時間だが、魯迅先生にとってはまさに仕事を始められる時間だ⁵⁰。

仕事の前に、先生はほんの一時目を閉じ、煙草に一本火を付け、ベッドに横になられる。その煙草を吸い終わらないうちに、許先生はもうベッドで眠りに就かれている。（許先生はどうしてそんなに早く眠れるのだろうか。次の日は朝6時、7時から家の事をしなければならぬからだ。）海嬰はこの時三階でばあやと一緒に眠っている。

建物中が静まりかえり、窓の外にも一切音がなくなると、魯迅先生は起き上がり、書き物机に坐って、緑色のスタンドの下で文を書き始められる。許先生によれば、鶏が時を告げる頃、魯迅先生はまだ座っておられるらしい。町車がブーブーと叫び初めても、魯迅先生はまだ座っておられるという。

ある時許先生が目覚めしてみると、硝子窓は白々として、灯りももうさほど明るく見えなくなっていた。魯迅先生の後ろ姿も夜のように大きくはなかった。

魯迅先生の後ろ姿は黒っぽく、変わらずそこに坐っておられた。

人々が起き出すと、魯迅先生はようやく眠られる。

海嬰が三階から下りてくる。通学鞆を背負って、ばあやが学校まで送っていくのだ。魯迅先生の部屋の前を通る時、ばあやはいつも海嬰にこう注意する。

「静かに歩くだよ、静かに」

魯迅先生が眠りに就かれると間もなく、太陽が高く昇ってくる。太陽は隣の家を照らす、きらきらと。魯迅先生の花壇のキョウチクトウを照らす、きらきらと。

魯迅先生の書き物机はきちんと片付いている。書き終えた文は本で押さえてあり、筆は陶器の小さな亀の背に立ててある⁵¹。

スリッパが一足床にじっとしている。魯迅先生は枕の上でお休みだ。

魯迅先生はお酒を少々たしなまれるが、多くは飲まれない。小さいお椀に半分か、または一杯だ。魯迅先生が飲まれるのは中国酒で、ほとんどが花雕だ⁵²。

老靶子路に一軒の喫茶店がある。間口は一間ほど、で、中に席はあるが、少なく、静かだ。光があまりささないの、ちょっと寂れた感じだ。魯迅先生はよくこの喫茶店に行き、会う約束もほとんどここだ。主人はユダヤ人、恐らく白ロシア人だろう、太っていて、中国語はほとんど分からない。

魯迅先生、というお年寄り、木綿の長衣を着て、時折ここに来て紅茶を注文し、若者たちと一緒に一～二時間おしゃべりをされることがある⁵³。

ある日、魯迅先生の後ろの席に一人のモダンガールが座った。紫のスカートに黄色い服、模様のある帽子をかぶっている……その女性が出て行こうとした時、魯迅先生は彼女を見るなり、目を大きく見開き、彼女を長いことらみつめておられた。それからこう言われた。

「どういうつもりだ」

魯迅先生は紫のスカートに黄色い服、模様の帽子をかぶった人に対して、こんな見方をされた。

幽霊は結局のところいるのだろうか。伝説では出会った人もおり、そればかりか幽霊と話をした人も、幽霊に追いかけられたことのある人もいる。首つりの幽霊は人に出会うと壁に張り付くという。しかし幽霊をつかまえて皆に見せた人は誰もいない。

魯迅先生は幽霊に会った話を皆に話してくださった。

「あれは紹興にいた時です……」と魯迅先生は言われた。「三十年前のこと……」

その頃魯迅先生は日本の留学から戻り、ある師範学堂、何という学堂が忘れたが、そこで教えておられた⁵⁴。夜用事が無い時、魯迅先生はいつも友人の家に行って話をするにしていた。その友人が住んでいたのは、学堂から数里離れた場所だった。数里の道は遠くはないが、必ず墓地を通らなければならない。話し込んで時には遅くなってしまうこともある。11時か、12時になってようやく学堂に戻ることもしばしばだった。ある日、魯迅先生は帰りが遅くなり、空には大きな月が出ていた。

魯迅先生が帰り道を急ぎながら、ふと向こうを見ると、遠くに白い影が一つ見えた。

魯迅先生は幽霊を信じていない。日本に留学していた時は医学を勉強していて、しょっちゅう死人を運んで来ては解剖していた。魯迅先生は二十数体解剖したことがある。幽霊だけでなく、死人だって怖くない。だから墓地もそもそも怖くはないのだ。そのまま歩いて行った。

いくらも行かないうちに、その遠くの白い影は見えなくなった。と思ったら突然また現れた。しかも大きくなったり小さくなったり、高くなったり低くなったり、まさに幽霊のようだった。幽霊は変幻自在だというではないか。

魯迅先生は少しためらわれた。このまま行くか、それとも引き返すか。そもそも学堂に戻る道はこの道だけではない。これが最も近道というだけのことなのだ。

魯迅先生はそのまま歩いて行かれた。幽霊とはとどのつまりどんなものか見てみたいと思われたのだ。その時は怖かったけれども。

魯迅先生はその時、日本から戻って間もなくだったので、底の硬い革靴を履いておられた。魯迅先生はその幽霊めに致命的な一撃を与えてくれようと決心された。白い影の近くまで来た時、その影は縮こまった。蹲り、何も言わずに土饅頭に隠れた。

魯迅先生はその硬い革靴で蹴り上げられた。

白い影はうっと一声叫び、そして立ち上がった。目をこらして見ると、それは何と人であった。

魯迅先生はこうおっしゃった。蹴った時は恐ろしかったと。もし一撃で蹴り殺せなければ、自分が逆に災難に遭うかもしれない、だから全力で蹴ったのだ、と。

それは墓盗人が夜中に墓場で仕事をしているところだったのだ。

魯迅先生はここまで話すと笑い出された。

「幽霊も蹴られるのは怖いと見えて、蹴ったらたちまち人になりましたよ」

幽霊はしょっちゅう魯迅先生に蹴られたら良いのに、と私は思った。なぜならそれは彼が人になれるチャンスだから⁵⁵。

注

1) 魯迅がヘビースモーカーであることはよく知られており、多くの友人、知人がそれに触れている。

夫人の許広平は、初めて北京の彼の家に行った時、「煙草を片時も離さず、一本吸い終わるとまた

一本、マッチはほとんど使わず、2センチにも満たなくなった煙草で、火を継ぐのである」と驚いている。床は煙草の吸い殻と灰だらけで、それを女中が掃除していた。灰皿と吸口を使うようになったのは北京を離れて以後のことだった。広州で住んだ建物には多くの木版画が置いてあったので、火事を恐れ、手近の痰壺を灰皿代わりにしたことが始めだという。煙草も手に持たなくなるまで吸う。幸い広州には象牙製品が豊富にあった。そこで数センチの吸口を許広平が買ってプレゼントしたところ、以後それを使うようになったという。

魯迅は煙草の銘柄にはこだわらなかった、と許広平はいう。選ぶ基準は経済性だった。北京にいた頃は専ら「紅錫包」という銘柄を吸っていたが、広州に移ると、十本一組で1、2角のものを吸うようになった。この煙草には「三国志」だの「水滸伝」だのの絵がおまけに付いており、魯迅はそれを集めていたが、同好の若者たちに出会うと、惜しげもなく与えてしまった。

煙草を買って来るのは許広平の仕事だった。「日が経つと、私たちの部屋の一角には常にブリキ製の長方形の缶が積み上がるようになり、その後、ベークライト製の丸い缶も出回るようになると、ブリキ製の長方形の缶や丸い缶のほかにベークライト製のものが加わるようになった。ブリキ製の長方形の缶入りのもので割合に好んだのはStandard Tobacco Co.のと、青地に白くエジプトの人や牛、人面獅子神像が描かれている、The Flower of Macedoniaだった。当時値段は一缶たった5角で、五十本入っていた。しかしおよそ1円で百本はさほど経済的とは思われないのか、新しい煙草が出ると争って値下げをする。でも魯迅先生はよくこう言われていた。『私の吸う煙草は善し悪しとは関係ないのです。たくさん吸っても腹に入るわけではありませんからね』。だから百本入った小さな長方形の缶の、1円で二つ買える、それを長いこと吸っておられた。しかし、黒猫が一匹描かれた赤い丸い缶のも好まれたとってよいだろう。値段が割合高く、およそ1円と少し出さないと五十本買えない。あまり経済的ではないが、たまたま買ったのを吸われていた。しかしある時、十缶余りの『黒猫印』をくれた人があった。普通なら自分で吸うためにちゃんと取っておけばいいのに、そうはされず、友人や兄弟に分けてしまわれた。自分は安い煙草を吸い、良いのは客に取っておくという人があるのももともとだ。紙の箱の煙草で、よく『品海印』を買っていたのは本当だ。彼はシガレットケースを使わなかったし、置いておいても使わなかった。むしろ『品海』を二箱持って行くのが便利だったのだ。だから友人たちは彼の煙草について、その銘柄に注目していたが、実際は、以前吸っていたものは、まあまあだったし、値段も安かったから、割合よく吸っていただけのことなのだ（許広平「魯迅先生的香烟——紀念魯迅先生逝世九周年」1945：『許広平憶魯迅』1979、広東人民出版社）。

しかし魯迅のこの習慣は、煙草嫌いを随分悩ませたらしい。李霽野は「魯迅先生はひっきりなしに煙草を吸われた。だから小さな部屋にはすぐに濃い煙が充満する。私が煙草が苦手なのを知ると、笑ってこう言われた。どうしてもあなたにいやな思いをさせさせていただきますね、適当に窓を開けてください」と書いている（『憶魯迅先生』1936：『魯迅回憶録』1999、北京出版社）。

- 2) 蕭軍は初めて会った時（1934年11月）の魯迅の姿を描いている。それによれば、魯迅は帽子もかぶらず、マフラーもせず、黒の細身の短めの長衣にやはり細身の黒みがかった藍色のズボン、足には黒いキャラバン地のゴム底の靴を履き、早足で歩いた、という（『魯迅給蕭軍蕭紅信簡注釈録』1981、黒龍江人民出版社、以後『注釈』）。

魯迅の早足にはまたほかの証言もある。呉曙天（章衣萍夫人）は、町で魯迅を見かけたが、とても早足で、また何か考え事をしていたらしく、いくら大声で呼んでも気づいてもらえなかったと回想している（『日記片談』1942：『我記憶中的魯迅先生——女性筆下の魯迅』2001、河北教育出版社）。

- 3) 許広平は次のように回想している。「彼（魯迅）は服装に対してこだわりがなかった。恐らく一種の反感がそうさせていたのだろう。彼の言うところでは、幼い頃、家の者に新しい服を着せられると、それを汚さないように、必然的に始終監視され、警告され、立つも座るも不自由の上なかつたのが最も不愉快なことだったのだと。だから彼はむしろあまり良くない物を着た。木綿の物なら更に

良い。便利なのは、例えばおやつや甘いものを食べた後、傍に手ふきがなければ、そのまま自分の服でさっとふける。初めて上海に来た頃、着古した裕の上衣が破れたので、青のポプリンを買ってきて作り直したことがあった。出来上がったのに、彼は何としても着ようとしないう。つるつるして気持ちが悪いというのだ。仕方なくそれは他の人にあげてしまい、それからというもの、その種の布で服を作れなくなった。彼の最後の年になると、ひどく痩せて、服の重さに耐えられなくなったので、わざわざ真綿入りの、鳶色の、湖州絹織物の長衣を作ったが、何度も袖を通さぬうちに臨終の時の死出の衣となってしまった。恐らくこれが、彼が長じてから最も贅沢をした服であったと思う」。そしてこの文に続き、海嬰が父親の真似をして服で手をふくのでとても困った、と書いている。

また魯迅は夜中の2時頃、仕事を終えると、服のまま、蒲団も掛けずにベッドに倒れ込み、三時間ほど眠る。その後起き出して煙草を一服付け、濃い緑茶を飲み、甘い物をちょっと口にしてからまた仕事に向かった、という。許広平はその姿を、「兵士が戦場の塹壕で一休みするかのよう」だと評している（『魯迅先生の日常生活——起居習慣及飲食嗜好等』：『許広平憶魯迅』）。

- 4) 象牙の吸口については注1参照。
- 5) 蕭紅が文章の中で一貫して許広平を「許先生」と呼んでいるので、それに従う。
- 6) 蕭紅は文章の中で魯迅のことを「魯迅先生」とも「周先生」とも呼んでいる。
- 7) 蕭紅「在東京」(1937年8月)に、魯迅の死の数日後、日華学会が開いた追悼会に出席した中国人女性（恐らく蕭紅自身）のエピソードがある。「彼女の着ている服の色はまるでアンバランスだった。赤いスカートに緑の上衣のこともあったし、黄色いスカートに赤い上衣といったこともあった」。蕭紅が実際にこのような服装であったかはわからないが、魯迅に服装を評されたこの時の記憶がモチーフとなっているのかもしれない。
- 8) 原文は“放在褲子下邊的”。
- 9) 原文は“他的眼皮往下一放向我們這邊看着”。
- 10) 魯迅が、当時勤務していた南京臨時政府の移転に従って北京に移ったのが1912年5月。1920年からは、教育部に勤務しながら北京大学で教鞭を執るようになった。1923年12月、北京女子高等師範学校で「ノラは家を出てからどうなったか」と題する講演を行い、聴衆の女子学生たちに大きな影響を与えた。当時の学生の一人が許広平だったことはよく知られている。同じく当時の学生だった陸晶清は魯迅の授業について、このように語っている。「魯迅先生の授業は、教壇の上で偉そうにふんぞり返るようなものではなく、立て板に水のようにとうとうと、まるで独り言のように語られ、ノートが間に合わないほどの速さで講義をされた。しかし、深く掘り下げながらもわかりやすく教材を説き起こされ、現実と結びつけながら問題を提出し、学生にその問題を考え、分析させるよう、導かれた」（陸晶清「魯迅先生在女師大」1981：『魯迅回憶録』）
- 11) 魯迅が范愛農について書いた文章は『朝花夕拾』に収められているが（「范愛農」1926年11月18日）、ここにそういった眼光に関する描写は見当たらない。また魯迅には范愛農について「范愛農を哭す」（1912年、『集外集』）、「范君を哀しむ三章」（1912年、『集外集拾遺』）と題した詩があるが、ここにも該当の描写は見当たらない。
- 12) 1934年11月に上海に来た蕭紅と蕭軍は、何度か住居を変えている。

1934年11月～ 襄陽南路283号
1934年12月末～ 福建坊22号
1935年3月末～ 拉都路351号
1935年5月～ 新租界薩坡塞路190号
1936年初～ 北四川路永樂里

魯迅が初めて蕭紅と蕭軍の二人を自宅に招いたのは1935年11月6日である。この後二人は魯迅の家の近く（北四川路永樂里）に移る。蕭軍はその理由を二つあげる。「一つはこれ以上（魯迅）先生の精力を分散させたくなかった。先生が我々に返事を書かないでいられるようにしたい。小さなこ

とならその都度先生と話せばそれで解決できるのだから。二つ目の理由は、我々の気持ちだった。我々は自分たちが若く力もあると思っていた——特に私は。先生の生活や仕事の上で……少しでも力になればと、先生たちの手伝いをしたいと思ったのだ。先生の子供の生活を拝見していると、魯迅先生は御病気なのに、ほとんど不眠不休で仕事をされている。許広平先生は一家の生活を取り仕切るほかに、時には魯迅先生に代わって原稿を書いたりされている。海嬰はとても小さく、二人の雇い人は両方共若くなく、動きもまたたしている。……こんな現実の様子を見ているのは、我々にとっても辛かった。だから先生の近くに引越そうと決心したのだ。我々は魯迅先生と許広平先生にもこの『気持ち』をお伝えした。しかし魯迅先生と許広平先生は、何でもすべて『自力更生』で、人に『頼る』ことはしたくないと言われた。だから我々は実際ほとんどどの『お手伝い』もしていないのである」（『注釈』前言）

なお蕭軍自身の校閲を経た王德芬「蕭軍簡歴年譜」（『蕭軍紀念集』1990、春風文芸出版社）には、ほとんど毎日一度ないし二度会えるようになったので、それ以後文通もしなくなった、とある。

- 13) 「（魯迅）先生は話好きで、だいたい一度話し出すと何時間でも疲れを見せられない。私たちも深夜になるまで、帰りたいとは思わない。ある時私たちは、先生の創作活動が夜であることを知り、少しお話をした後、何とかおいとましようとしたが、先生は、自分の唯一の休息と楽しみはおしゃべりなのだから、もし時間があるのなら自分は少しもかまわないのだと言われた。私たちももちろん喜んでまた腰を下ろしたのだった」（李霽野「憶魯迅先生」1936：『魯迅回憶録』）
- 14) 象牙の吸口については注1参照。
- 15) 「友人」は恐らく蕭軍である。この時二人は同居していたが、その後間もなく蕭軍の女性問題がきっかけとなり、蕭紅は単身東京に向かう。半年後帰国し、暫くは同居が継続されるが、間もなく抗日戦争の中で別離を迎える。「回憶魯迅先生」を書いた時、蕭紅は既に蕭軍と別れ、端木蕻良と重慶で同居していた。また蕭軍は別離の後延安に行き、新しい家庭を持っていた。重慶に住んでいた、二人の共通の友人である胡風夫人梅志が、蕭軍から送られてきた新婚の写真を蕭紅に見せたところ、蕭紅は暫く黙り込み、その後胡風の家を訪れることはなかったという。梅志が語るこのエピソードの正確な時期は不明だが、「回憶魯迅先生」を書いた時期とほぼ一致すると思われる。
- 16) 注12参照。
- 17) 許広平は、魯迅の食生活は大変に質素で、燕の巣とか白キクラゲといった高級品はあまりありがたがらなかった、といっている。忙しい時は卵チャーハンなどで簡単に済ませることもあった。焼餅の類は好きで、客があるとよく買って来た。また軟らかいキュウリなども果物代わりによく食べた。「彼はさっぱりした、土の香りのする、農民の食べ物好んだ。彼は新鮮なものを好んだ。紹興の人が食べる漬物とか干し野菜、魚の干物などはいいとは言わなかった。『干した野菜や漬物は何れも農村で作られるものです。缶詰の類は外来の文明で、こちらは工業製品です。中国の大部分の食物保存の方法は、未だに農業時代を脱していません』。しかし彼は紹興の臭豆腐や臭千張（豆腐を薄く切ったもの）のような臭い物は好きだったし、私も食べるようになった」。また魯迅は紹興で新年に振る舞われる「蓮子羹」も嫌いで、絶対に食べなかったという（許広平「魯迅生活之一」1939：『許広平憶魯迅』）。
- 18) 原文は“海嬰公子”。魯迅と許広平の一人息子、周海嬰。魯迅と海嬰の関係はこの文章の中にも何度となく出て来るが、魯迅は遅く生まれたこの息子を大変かわいがっていた。

許広平の回想（『魯迅先生與海嬰』1939：『許広平憶魯迅』）によれば、難産で、1929年9月27日の朝に来た陣痛は二十七～八時間続いたという。「子どもを取るか母親を取るか」と医者に聞かれた魯迅は、躊躇なく「母親を」と答えたが、無事生まれてみるとたいそう喜び、一日に少なくとも三回は病院に尋ねてきたという。また海嬰誕生の翌日、魯迅が許広平に珍しく「花」をプレゼントしている。「以前彼は私にたくさんの物をくれたが、すべて本だった。ほかの友人たちに送るのと同じように。ところが今回恐らく一生懸命考えて私に花を贈ってくれたのだろう。しかしそれは目にも美

しい色とりどりの香り高い花ではなく、突き刺すような尖った葉の松の枝だった。彼のちょっとした好みが見える」

十二日後、許広平が子どもを抱いて家に戻ったところ、普段は家のことをあまり気にしない魯迅なのに、家の中がきちんと整頓されていたことにいたく感動している。また子育てに関して、二人は全く経験がなかったため、とりあえず育児書を買ってきたが、なかなかその通りうまくいかない。三時間に一回、片方の乳房から乳を飲ませる、と書いてあったのでその通りにしたところ、子どもはどんどん痩せていく。魯迅はついに「痩せてもいい、病気にならなければ」と言うが、二ヶ月余り後、風邪を引いたので医者に見せたところ、痩せすぎを指摘され、牛乳やおかゆなどで補うよう注意される。また、風呂にもうまく入れられないので風邪を引かせてしまう。そこで魯迅は、入浴をさせず、一時間毎におしめを取り替えるよう指示したが、今度はお尻がかぶれて皮が剥けるほどになってしまった。結局病院から看護婦に来てもらい、看護婦に入浴させてもらうことになった。

魯迅は友人が来る度に海嬰を抱いて見せ、海嬰が寝ていてもわざわざ抱いて来させるほどだった。許広平の文章からは、魯迅が海嬰を眼の中に入れても痛くないほどにかわいがっていたことがわかる。蕭紅の「公子（お坊ちゃま）」という表現も、それを反映してのことであろう。

- 19) 許広平は広東省番禺県の役人の家に生まれたが、生まれた時に母親の腹に尿を掛けたため、母親に対して禍をもたらすと見られ、また家勢も傾いたために、家庭の温かさを知らずに育ったという。通わされた家塾では四書五経を講ずる先生の言うことを一向に聞かず、また生まれて三日目に父親が酔いに任せて自分の結婚を決めていたことを知り、1917年、二番目の兄の援助を得て婚約を解消、単独天津の伯母の家に行き、直隸第一女子師範に入学する。そこで彼女は後に周恩来夫人となる鄧穎超らの天津女界愛国同志会に参加し、『醒世周刊』の編集を担当する。1922年、魯迅の友人である許寿裳が校長を務めていた北京女子高等師範学校に入学、魯迅も1921年7月より許寿裳の招きで、当校で教鞭を執ったことは注10で述べたとおりである。しかし二年後、校長が替わるとその封建的な教育方針に学生たちの不満がつのり、校長の更迭を求める運動が起こる。そして彼女たちの運動を支持した魯迅との間に交流が生まれ、それが次第に愛情へと発展した（盛英主編『二十世紀中国女性文学史』1995、天津人民出版社／陳漱渝『許広平伝』2011、人民日報出版社）。
- 20) 韭菜合子は、現在でも屋台などで焼きながら売っている、韭菜入りのおやきのような食べ物。荷葉餅は『東京夢華録』にも登場する伝統的な食べ物だが、諸説あるようで、北京ダックを包んで食べる時の春餅のようなものだとか、マントウのようなものだとかいはわれている。『中国美食大全』（2000、華夏出版社）には「荷葉蒸餅」という料理が挙げられているが、これは餅米粉と米粉を混ぜて団子にしたものに豚肉を包み、蓮の葉に包んで蒸したものである。また蕭紅のテキストによっては「合葉餅」としているものもあり、こちらの方は「春餅」に近いものようである。

許広平は、蕭紅は荷葉餅と餃子が特に上手だったといい（「追憶蕭紅」1946）、また海嬰は『魯迅與我七十年』（2006、文匯出版社）に次のように書いている。「多少（魯迅の）状態が良い時は、蕭軍と蕭紅の二人が訪ねてくれた。この時は父（魯迅）もいつものように下に下り、彼らと雑談をしながら蕭紅の料理の腕前を見ていた。餃子や合子はお得意の北方料理で、あつという間に熱々のがテーブルに並んだ。まさにアラジンの魔法のランプの再現であった。特に葱花烙餅はすごかった。真っ白な小麦粉の生地と層の間に鮮やかな緑色をした葱のみじん切りが挟まっている。表面はこんがり、中はしっとり、さくさくして香ばしい。これには父もつい普段よりもたくさん食べ、賞賛を惜しまなかった」。また海嬰は二人が来ると「家族の心に重くのしかかっている暗雲が晴れていくよう」で、「二人がしょっちゅう来て、この家に明るさと温かさをもたらしてくれれば良いのに」と思ったという。

- 21) 「脾胃自美」は薬の商品名と思われるが、不明。ここでいう「脾胃」は脾臓ではなく、消化吸収に関わる五臓の「脾」を指す。
- 22) 瞿秋白（1899～1935）はロシア語を学び、1920年、革命後のモスクワに『晨报』特派員として入り、

『赤都心史』などのルポルタージュを書いている。魯迅と知り合ったのは1932年で、魯迅は何度も彼を自宅にかくまっているが、1935年国民党に逮捕され、処刑された。「海上述林」は彼の死後、彼が翻訳した文章を魯迅が集め、出版したもので、上下二巻に分かれる。上巻にはマルクス、エンゲルス、レーニン、プレハーノフ、ラファルグらの文学論文、及びゴリキー論文選集と拾補などを収め、1936年5月に出版された。下巻はゴリキーやベードヌイの諷刺詩、ルナチャルスキーの戯曲、ゴリキーの創作選集などを収め、1936年10月に出版されている。魯迅が上下巻それぞれに書いた序文は、いずれも『且介亭雜文末編』に収録されている。上巻序文の日付は1936年3月下旬、下巻序文の日付は1936年4月末である（2005年人民出版社版『魯迅全集』）。

- 23) 原文は魯迅、蕭紅とも“来啦！”である。
- 24) 許広平は、上海に来て以来、状況が緊迫してくると、親戚や友人が次第に自分から遠ざかっていき、日常的には魯迅と話す以外友人もなく、孤独だったといっている（『憶蕭紅』：『大公報・文芸』1945.11.28）。
- 25) 周建人（1888～1984）は魯迅の二番目の弟で、生物学者。魯迅の一番上の弟周作人の妻、羽太信子の妹、芳子と結婚し、鞠子、豊二をもうける。その後、上海で許広平と同窓の王蘊如と同棲し、擘、瑾、蕓という三人の娘をもうけている。周建人夫婦は毎週土曜の午後、三人の娘のうち一人を連れて魯迅の家を訪ねることが習慣となっていた（周擘「伯父魯迅の二三事」：『我記憶中的魯迅先生』）。

また王蘊如は、当時自分たちが住んでいた善鐘路は魯迅の家から遠く、頻繁に訪ねることができなかった。周建人はよく訪ねていたが、自分たちは毎週土曜日に行くことにした、といっている。

「当時私たちには既に三人の子どもがあった。子どもが多ければうるさいので、一回に一人ずつ、順番に子どもを連れて行くことにした。伯父さんの家に行くとなると、子どもたちは大喜びで、早くからそれを首を長くして待った。その日は海嬰もとても喜んだ。姉妹と遊べるのだ。それを彼は『土曜の最高』と言った。土曜日は最高に嬉しいという意味である。魯迅は私の上の娘を阿玉と呼んだ。次女は魯迅が上海に来た時まだ小さくて、^{アアアア}苦アアアアと言っていたので、魯迅は彼女を阿苦と呼び、それが言い習わされて彼女の幼名になった。

毎週土曜日、私はいつも子どもを連れて魯迅の家に行き、建人は商務印書館から直接行った。建人が来るのが遅いと、いつも魯迅は心配して上へ下へと何度も行き来し、こうつぶやく。『老三（建人）はどうしてまだなんだ』。建人がやって来るとようやく安心する。建人が来ると、兄弟は二階に上がって話をし、私たちは下で許広平の夕飯の手伝いをする。

夕食は、許広平が広東料理や鶏の煮込みをいくつか作る。蟹がある時は蟹を食べる。兄弟はいつも酒を飲みながら語り、笑う。夕食後は二階に上がってお菓子や果物を食べる。お茶を飲みながら話をするのだ。天下の大事や風土人情について話すこともあったし、幼い時の紹興の話をすることもあった。面白いところに来ると大笑い。いつも11時過ぎまで話し込む。電車はとっくにない。すると魯迅は車を呼び、あらかじめ金を払って私たちが家まで送ってくれた。

魯迅は子どもが大好きで、よく服や、本や、おもちゃを買ってくれた。彼のプレゼントはどれも教育的な意味が豊かに含まれていた。周擘はだんだん大きくなり、小学生になった。魯迅はよく本を彼女に買ってくれたし、自分が訳した『時計』とか『小さなピーター』などをくれた。その後彼女に本の内容を聞くのだ。周擘が答えられないことがあると、彼は笑って『ははは、まだこのおじいさんの記憶力は大丈夫だな』と言ったものだ。（中略）その後魯迅が病気になる、私たちは毎週二回訪ねた。一回は水曜日、もう一回は土曜日に。もちろん土曜日だけ子どもを連れて行った。

魯迅がこの世を去る数日前、確か10月10日だったと思う。私と建人が彼を訪ねたが、彼が許広平と一緒に映画を見に行っているなんて、誰が想像しただろう。私たちは下で長いこと待った。二人は映画館から戻って来て、『すまない、すまない、長く待たせたね』と言う。気力はまだ充実していた。それから数日後にこの世を去るとは思ってもみなかった」（王蘊如「回憶魯迅在上海的片断」1986：『我記憶中的魯迅先生』）

なお、魯迅の10月10日の日記には、「昼すぎ、広平と共に海嬰を伴い瑪理（周建人と羽太芳子の娘鞠子のこと）を誘い、上海大戲院に行き、“Dubrovsky”を見る。甚だ良し。午後、三弟（建人）及び蘊如、擘兒を伴い来る」とある。

- 26) 恐らく馮雪峰（1903～76）であろう。浙江省義烏県（魯迅の故郷である紹興から南西におよそ100キロ）の出身で、1928年柔石を通じて知り合い、共に科学的芸術論叢書を編集、1933年江西ソビエト地区に移り、長征に参加した後、1936年上海に赴く。国防文学論争では魯迅を支持し、周揚らを批判した（『中国現代文学事典』1985、東京堂出版）。「馮雪峰生年表」（『馮雪峰紀念集』2003、人民文学出版社）によれば、1936年4月上旬、中共中央が彼を特派員として上海に送ることを決定。魯迅を通じて状況を把握し、上海の地下党との連絡を確立するよう命じられる。彼が李允生という偽名で上海に到達したのは4月25日である。翌日彼は秘密裏に魯迅の家に移り、その夜は魯迅と深夜まで話し込んだという。27日、魯迅と「民族革命戦争の大衆文学」というスローガンの提出について相談し、その後茅盾、沈鈞儒、宋慶齡、スメドレーらと会い、また周文、王学文、王曉山等党関係者とも連絡を取った。彼が魯迅の家を出たのは5月中旬である。当然魯迅日記には彼に関する記述はないが、周建人一家が土曜日に必ず訪れていたことなどを勘案すると、この夕食会は5月2日か9日、もしくは16日のいずれかである。ただし蕭紅は本文中で、魯迅の家で少なくとももう一度彼に会ったと書いているので、馮雪峰が5月中旬に魯迅の家を出たとすれば、一回目は2日だろうか。

また『馮雪峰紀念集』所収の年表によれば、5月31日、許広平、スメドレーらと相談し、上海に来ていたアメリカ人のダン医師に魯迅の治療を依頼している。

更に6月9日「トロツキー派への回答」を、翌日には「現在の我々の文学活動について」を魯迅から口述筆記している（学研版『魯迅全集』6月の日記に対する訳者注による）。

- 27) 『偽自由書』は1933年1月～5月に上海『申報・自由談』に執筆した文章を集めて1933年上海で刊行された。『二心集』は1930年～31年に発表した文章を集めて1932年に上海で刊行されたが、翌年発禁処分を受けている。
- 28) 日本では「キグチ」と呼ばれている白身の海洋魚。
- 29) 「魯迅」先生の嗜好は三つ、煙草と酒と飴だ。この三つの嗜好は、普通の人でももちろんある。だが先生の嗜好の程度は相当なもので、それは先生の学問と同様だった。煙草は、初めはほとんど吸われなかったが、その後勧める人があって、煙草では物足りなくなり、葉巻を吸われるようになった。いつも煙草を口から離すことがなかったので、顔や手は黄色く燻され、まるで『阿片』吸引者のようだった。酒は好んで飲まれるだけでなく、量もなかなかのものだった。毎日飲まれる。最初はビールで、いつも何本も何本も飲まれた。それからはビールでは物足りなくなり、『白干』や『紹興酒』なども飲むようになった。飴は、普通は子どもが好きなので、いい歳をした大人にはこういった嗜好はあまりないものだ。魯迅先生は飴をいちばん好まれた。食事の時は、もちろん先ず飴か甘いものを食べる。先生のポケットにはいつも甘いものが入っていて、好きな時に口にされていた。先生の体が弱かったのは、こういった三つの原因も関係が無くはあるまい」（沈兼士「我所知道的魯迅先生」1936：『魯迅回憶録』）
- 30) 本文と直接関係はないが、魯迅の死後、許広平が蕭軍に、蕭紅の「生死場」の原稿はととも読みにくく、魯迅を悩ませたと語っている。「原稿が日本製の薄い紙を使っていて、しかも複写紙を使って書かれており、字が小さくて細々していたからです。周先生は夜の明かりの下で読まれたので、原稿の下に白い紙を一枚敷かなければはつきり読めませんでした。周先生は老眼鏡を掛けて、原稿を読みながら、自分で嘆いておられました。『ああ、目が駄目になった』」（蕭軍「讓他自己……」1936）
- 31) 魯迅は映画が好きで、日記にも映画に行ったという記録が多く残っている。その中には蕭軍や蕭紅を誘って一緒に映画を見たという記録が二回見られるが、一回目は1936年3月28日、周建人一家や

許広平、海嬰も一緒に、麗都影戲院で「絶島沈珠記」後編（学研版『魯迅全集』注によれば、1934年製作のアメリカ映画で原題は“The Lost Jungle”）を、もう一回は同年4月13日、胡風、蕭軍、蕭紅、許広平と上海大戲院で“Chapayev（チャパーエフ、中国題名は「夏伯陽」、日本の題名は「赤色親衛隊」）”を見ている。後者は学研版『魯迅全集』注によれば、1934年製作のソ連映画で、魯迅はこの映画を二度見ているという。ただこれは「ニュース映画」ではない。

- 32) ケーテ・コルヴィッツ（1867～1945）はケーニヒスベルクで生まれている。父親のカール・シュミットは大学で法学を修めながら、反動的な国家に仕える法職を放棄して建築マイスターとなった人物、母方の祖父は当地でよく知られた神学者で、「大学で神学、歴史、哲学を専攻し、哲学と文学史で大学教授資格を取得、ギムナジウムの教師を経て1942年、この街の牧師になった。リベラルな考えから、国家の反動的な政策と対立、1843年に自由プロテスタントの立場に立ち『信条強制とプロテスタント・教義及び良心の自由』を著した。（中略）1845年には、聖職を追われ、十九年間無給講師としてつけた大学での神学講義も断念せざるをえなかった」（志真斗美恵『ケーテ・コルヴィッツの肖像』2006、續文堂出版）。ケーテは14歳の時、ケーニヒスベルグの銅版画家ルドルフ・マウアーに師事、ベルリンの女子美術学校で学んだ後、ミュンヘンの女子美術学校で学ぶ。最初の銅版画を制作したのは23歳の時である。翌年、兄の友人で医師のカール・コルヴィッツと結婚、版画、及び彫刻の創作活動を行い、高い評価を得る。作品を通じて反戦を訴え、ナチスより迫害を受ける。1931年、最初に彼女の作品を中国に紹介したのは魯迅で、その後、彼女と親交のあったスメドレーの援助なども得て作品を収集し、画集の編集と出版に尽力する。『ケーテ・コルヴィッツの肖像』は、コルヴィッツの1928年3月の日記にスメドレーの名が一度だけ登場することを紹介しているが、そこには「わたしは、スメドレーと知りあってこのかた、彼女に共感を覚えている」と書かれているという。

許広平は魯迅の版画への関心について、「平生、彼はとてもシンプルで、特に趣味も無かった。たまたま木版を集めるのが好きになり、国外から新しいものが来ると、何週間も眺めていることがあった」と記している（『魯迅生活之二』：『許広平憶魯迅』）。

- 33) アグネス・スメドレー（1892～1950）は、アメリカ、ミズーリ州の貧農の家に生まれる。正規の教育を受ける機会を持たなかった彼女は、結婚して移住したカリフォルニアで社会主義の思想に触れ、その後離婚してニューヨークに行き、インド人共産主義者と親交を深め、彼と共にドイツに渡る。ドイツでコルヴィッツと親交があったことは既に注32で述べた通りである。1928年末、中国に渡った彼女は翌年12月に魯迅に手紙を書いている（「25日 晴。午前、スメドレー女史より手紙。昼すぎ、返信」：『魯迅日記』）。スメドレーが初めて魯迅を訪ねたのは同月27日である（「スメドレー女史は『フランクフルト日報』の通信員なり、写真四枚求め、持ち行く」：『魯迅日記』）。

- 34) 「夏伯陽」については注31参照。『魯迅全集』（1981、人民出版社）注によれば、「復讐遇艶」は、プーシキンの小説「ドゥプロフスキー」を脚色したもので、1936年10月10日付黎烈文宛書簡に、この日午後上海大戲院で見たがとても良かったと書いている。「人猿泰山」は見当たらないが、1935年2月16日の日記に、許広平、海嬰と麗都大戲院で「泰山情侶」を見たという記録がある。学研版『魯迅全集』注によれば、この映画を見たのは1934年9月22、23日に次いで三回目であったという。

- 35) 日記を見ると、魯迅は動物に関わると思われる映画をよく見ている。例えば1935年4月4日には新光大戲院で「漫遊獣国記（“Baboon”、1935年製作のアメリカ映画で、中央アフリカを舞台にした記録映画）」を見ているが、この映画は気に入ったのか、同年10月27日、許広平、海嬰を伴って蕭軍、蕭紅を訪ねるが会えなかったため、融光大戲院に行って再びこの映画を見ている。そのほか、題名などから動物に関わっていると思われる映画を蕭紅らが上海に出た1934年11月以降の魯迅の日記から試しに拾ってみると、以下のようである。なお原題などは学研版『魯迅全集』及び2005年版『魯迅全集』（人民文学出版社）によった。

1934年11月14日 金城大戲院「海底探検（“Sea Killer”、1933年製作のアメリカ映画）この日に魯迅は蕭軍、蕭紅からの手紙を受け取っているが、『注釈』によれば、上海に出て来たものの、

生活に困窮し、思い余って魯迅に借金を申し込んだものであったという。

1935年4月8日 融光戲院「沈珠島（“Pirate Treasure”）（1934年制作のアメリカ映画）」前編。
11日に後編を見ているが、あまり面白くなかったらしい。

同年4月9日 融光戲院「海底尋金（“Below the Sea”、1933年制作のアメリカ映画）」

同年4月30日 ^{カールトン}カール登影戲院「荒島歷險記（“Danger Island” 1934年制作のアメリカ映画）」後編。これも気に入らなかつたようで、甚だ拙劣で、「沈珠島」と変わらないと書いている。

同年5月11日 新光大戲院「獣国尋屍記（“Savage Gold”、1933年制作のアメリカ映画、南エクスアドルのジャヴィロ族部落の記録映画）」

同年8月14日 南京大戲院「野生的呼声」（“Call of the Wild”、1935年制作のアメリカ映画）」
ジャック・ロンドンの原作だが、原作とは全く違うと書いている。

同年10月3日 ^{パリ}巴黎大戲院「黄金湖（“Golden Lake” ソ連制作の冒険映画）」

同年11月3日 カール登影戲院「海底探検（龍宮歴記、“With Willison Beneath”、アメリカの探検映画）」、原題は2005年版による。学研版では“Beneath The Sea”。

同年11月10日 カール登影戲院「獣国古城（“Angkor”、詳細不明）」

同年11月24日 南京戲院「尋子伏虎記（“O’shaunessy’s Boy”、1935年制作のアメリカ映画）」

同年11月26日 カール登影戲院「蛮島黒月（“Black Moon” 1935年制作のアメリカ映画）」

1936年1月12日 カール登影戲院「万獣女王（“Queen of The Jungle” アメリカの探検映画）」前編

同年1月15日 「万獣女王」後編

同年3月28日 「絶島沈珠記（“The Lost Jungle”、1934年制作のアメリカ映画）」

この時は蕭軍、蕭紅及び周建人とその家族、許広平、海嬰が同行している。

同年5月10日 大上海大戲院「龍潭虎穴（“Fang and Claw”、1936年制作のアメリカの探検映画）」

許広平が「魯迅生活之二」（『許広平憶魯迅』）で、魯迅には特別な趣味はなく、たまたま版画に関心を持った、と記していることは既に述べたが、映画についても、映画をよく見るようになったのは上海に来て以後のことだという。彼女はこのように書いている。「彼（魯迅）の映画の選択は、大自然、例えば野獸を描いた映画などに偏っていた。子ども映画や歴史物も見たが、最も嫌ったのは世紀末の雰囲気漂う墮落した退屈な映画だった。中国の映画については、広州で一緒に「詩人挖日記」という映画を見たが、内容がいい加減で演技も古くさかつたので、彼は見終わらないうちに出てしまった。それからというもの、中国の映画は見なくなってしまった。ソ連の映画はその偉大さで人を奮い立たせるので、新しい映画が来るとほぼ必ず見に行った。最後は去年（1936年）の双十節、上海大戲院で「復仇艷遇（ドプロフスキー）」を見た。彼は気に入って、長いこと友人に勧めていた。その映画の中で、農奴が最後に地主に一撃を加えるシーンを、彼は最も気に入っていた」

- 36) 兆豊公園（ジェスフィールド公園）は「1914年、西洋人の個人庭園の一部を工部局が買い取って公園として開放。（中略）当初は外国人にのみ開放され、1928年以降中国人の入園が認められる」（木之内誠『上海歴史ガイドマップ』1999、大修館書店）。現在は中山公園と呼ばれ、大陸新村の魯迅の家からは直線で南南西に八キロ近く離れている。また虹口公園は、「1896年工部局が農地を買い取り、租界義勇隊の射撃練習場を設けたことに始まる。西部を運動公園として整備、1905年正式開園。テニスコート、ゴルフ場、サッカー場など外国人を対象とする各所のスポーツ施設を開設。1928年以降、中国人にも入園を許可する」（『上海歴史ガイドマップ』）。大陸新村の魯迅の家からは北に三百メートルほどの距離にある。現在は魯迅記念館や墓所が置かれ、魯迅公園と改名されている。

許広平は北京時代、彼の数少ない楽しみは中央公園に行くことだったと書いている。行くこと長いこと帰って来ない。恐らく公園の中にあった図書館に行ったのだろう、と彼女は想像している（『魯迅先生的娛樂』1939：『許広平憶魯迅』）。

- 37) 旧フランス租界にあった公園で、中国名は顧家宅花園、現在は復興公園（『上海歴史ガイドマップ』）。
- 38) 原文は“黒土藍”。“士林藍布”が「インダンスレン・ブルーで染めた布」（大東文化大学『中国語大辞典』1994）とあるので「濃紺」と訳した。
- 39) 魯迅の服装については注2、及び注3参照。また許広平は「魯迅生活之一」に、魯迅は断固として木綿の服しか着なかった、と書いている。破れたら繕い、それで平気だったので、印刷所に製品を取りに行けば、どこかの店の走り使いかと思われ、外国人の住居を訪ねれば、ボーイと思われてエレベーターに乗れないこともあったが、「これらの待遇に対して、彼は腹を立てたりすることもなく、それを笑い話の材料にすることすらあった」（『許広平憶魯迅』）
- 40) 内山書店であろう。
- 41) 蕭軍は魯迅の持っていた風呂敷包みを「紫の地に白い花模様の日本式の風呂敷」（『注釈』第八信注）と描写している。
- 42) 老靶子路（Range Road、現在は武進路）の本屋は「公道書店」か。『上海歴史ガイドマップ』によれば、「1930年代の左翼シンパの開いた書店。左聯のアジトの一つとなり、1931年馮雪峰らが『前哨』五烈士記念号を書店三階の小部屋でひそかに製本」した本屋である。
- 43) 許広平は、魯迅は書籍や文房具を命よりも大事にしていた、と回想している。「例えば本が汚れると、急いで袖で拭く。手は汚いから。手も必ず洗ってから頁をめくる。本棚の本はとでもきちんとしておられ、すべての文房具は何れも彼自身によって、決まった場所に置かれており、乱雑に置かれることは決してない。彼は常々こう言っていた。『物には決まった場所がなければなりません、取る時に便利だからです。例えば薬の瓶ですが、場所を換えれば、薬剤師が薬の調合を誤る危険があるでしょう』。彼は物を処理する時、薬局のように整然と順序正しくする。どれほど忙しくても、文を書き終わると、必ず机の上を整理し、それから初めてほかのことに取りかかる。彼の引き出しも同様にきちんとしており、他人にいじられるのを嫌う。北京にいた時、彼の小さな寝室は常々客室にもなっていたが、他人が手当たり次第に本を触るのをいやがり、好きな本はいつもあまり注意の向かないような所に隠してあった。彼は本を他人に貸すのはもったいやがった。やむを得ない時以外、たまたま借りに来ると、むしろもう一冊買って贈る方が気が休まるのである」（『魯迅先生の日常生活』）
- 44) この記述は、周建人夫人王蘊如の回想とかなり異なる。王はこのように書いている。
「海嬰が生まれてから、王阿花という乳母を雇った。彼女はそもそもが真面目でなく、頭の中は空っぽだった。その後、突然精神的に不安定になった。目の見えない古い師や托鉢の僧侶などを見かけると、必ず呼んできて占ってもらったり、黄色い紙に書かれた御札を買ったりするようになった。最初は皆も怪しまなかった。田舎の人は迷信を信じるところがあるからだ。しかし次第に王阿花はぼんやりするようになり、とうとう町にも出られなくなってしまった。
そもそも王阿花は亭主に売り飛ばされて山里に来た後、上海に逃げて来たのだ。ある日彼女は道でばったり同郷の人に出会ってしまった。すぐに逃げたのだが、とうとう亭主に見つかってしまい、何度か出かけるうち、尾行されているのに気づいたのだ。彼女はちゃんと言えなかったのだが、主人（魯迅）が彼女を亭主に返してしまい、再び売り飛ばされるのを恐れていたことをうまく説明できずにいたのだ。許広平が彼女の様子がおかしいのに気づき、何度も問いただしたところ、ようやく訳を話した。それからは果たして何人かの人が魯迅の家の周りをうろつき、王阿花は恐ろしくて一歩も外に出られなくなってしまったのだ。こうして何日も経った。ある日、私は裏口に立っていた。王阿花は私の後ろの台所の水道でおしめを洗っていたが、顔を上げて裏門の外を見るなり、何かを見つけたらしく、おしめを放り出して二階に逃げて行ってしまった。魯迅はちょうど書き物をしていた。彼女は魯迅にこう言った。『あいつらが裏口に来ます』。魯迅は、『私が行こう』と言うと、筆を置いて急いで下に下りて行った。

この時、何人かの人がもう裏口に立って、首を伸ばして中を探っていた。私が立っていたので、

彼らはすぐには入って来られなかった。魯迅が彼らに名前を尋ねると、上虞同郷会の者で、王阿花を連れ戻しに来たと言う。魯迅は、弁護士を通じて話そうと言って、裏門を閉めてしまった。

数日後、上虞の名士で、紹興の人が大物と呼んでいる魏福綿がやって来た。魯迅の顔を見るなり、『誰かが強引に女を渡さないでいるとふんでいたのですが、先生でしたか、これはどうしたものでしょう』と言う。そもそも魏福綿は魯迅の学生だったことがあるのだ。魯迅は状況を一通り説明し、彼に、人身売買は今禁止されていると言った。魏福綿は、戻って彼等に、二度と騒ぎを起こさないように言うのと約束した。しかし魯迅はその後160元を出して王阿花を買い取った形にし、彼女を自由にしてやった。その後、王阿花は嫁に行った」（「回憶魯迅在上海的片談」）

一方許広平は女中について、上海に来て最初の二年ほどは人を雇わず、周建人の所の女中が来て手伝ってくれていたし、食事の時も周建人の家に行って一緒に食べていた。が、海嬰が生まれてからはどうしても一人雇わざるを得なくなった。ところがその女中は寒い中、海嬰を抱いて町に出、男友だちと立ち話をするような女性だったので、海嬰が七ヶ月になった時、引っ越しを機に解雇したという。許広平の文章には、その後も女中がいるような記述はあるにはあるが、王蘊如がいうような人物については書かれていない（「魯迅先生與海嬰」）。

また王蘊如の長女周暉は、魯迅が死んだ時、彼の家には阿三と呼ばれる女中がいたという。

「（彼女は）労働者の妻で、夫が失業してから心の悩みと働き過ぎから、まだ若いのに腰は曲がり、しかも両方の目も役に立たなくなった。完全に失明したわけではなかったが、物がはっきり見えず、まるで霧が掛かったようになってしまう」（「伯父魯迅的二三事」1945：『我記憶中的魯迅先生』）と書いている。

45) 注28参照。

46) 蕭軍から寄せられたこの情報（手紙）に対する魯迅の返信（1935年4月12日）に、蕭軍は注釈を付けている（『注釈』第二十五信注）が、蕭紅の記憶とは違い、パンテレーエフ「時計」の翻訳の手書き原稿だったとしている。

「ある日、我々は敦和里大門口北側の油条屋で油条を買った。家に持ち帰って、油条を包んでいた紙が、何と魯迅先生が訳されたパンテレーエフの「時計」の手書き原稿二枚であることに気づいた。これには私も蕭紅も腰を抜かささんばかりだった。それから私は大急ぎで油条屋に行き、まだこういった包み紙があるかどうかを聞いたが、彼らは『もうない』と言う。当時我々はがっかりもしたし、哀しくもあった。我々はこの油条の包み紙をすぐに魯迅先生に送り、先生に『時計』の原稿を取り戻して下さるよう書いたのである。我々は手紙の中で『怒り』をおちませた。中国というこの国家、ひいては文学界において、彼らは魯迅先生のような『余人を持って代えがたい』作家の手書き原稿を、こともあろうに油条を包むのに使う、これは何と哀しむべき現象であろうか、と。およそ自分の国家の、人々に良い影響を及ぼした、傑出した人物、ひいては彼らの事業、功績……それらに対して尊敬の念を持たない国民を持つ、この国家もまた哀しむべきである、と。

だが魯迅先生はほとんど自嘲するようにこういわれた。

『わたしの原稿の境遇を知って、許はいくらか悲しかったようです。が、わたしは満足しております。なんと、まだしも油条を包むことができるのですから、いくらかは使い途があったことがわかります。というのは、わたしが使っているのが中国紙で、洋紙よりはよく水を吸収するからです』

その後、先生の家に行くと、確かに『机を拭く』現象を目にした。そればかりではない。便所の中にも、あろうことか先生が書かれた手書き原稿の紙が四角く切って、別の用途のために置いてあるのを発見した。許広平先生によれば、自分が急いで回収するのだが、ちょっと目を離すとすぐ、そのようにしてしまわれるのだという。先生は『手書き原稿』の類を残しておくことを望まれていないようだ。この点が到る処に『字を書』いて永遠に残ろうとする『旦那様方』『先生方』とは違うところである」

一方「死せる魂」の翻訳については、魯迅自身がこのように書いている。『「世界文庫」の編集者に、

ゴーゴリの『死せる魂』の翻訳をしてくれと言われ、仔細に考えもしないで、その場でひきうけた。この本は、ざっと一通り読んだことがあるだけだった」（『題未定』草：『且介亭雜文二集』）。魯迅はドイツ語訳を底本とし、上田進の日本語訳を参考にしながら翻訳したらしい（『学研版』『『文人は互いに軽視しあう』こと、その五』注による）。

日記にはこの翻訳について、以下のように記録されている。1934年4月24日「ゴーゴリ『死せる魂』一冊、2元を買う」、1935年2月15日「『死せる魂』の一節を訳す」、3月12日「『死せる魂』第一及び第二章を訳了、約二万字」、5月8日「『死せる魂』第三章を訳し始める」、5月23日「西諦に手紙と『死せる魂』第三、四章の訳稿を送る」、6月11日「夜、『死せる魂』の第五章を訳し始める」、6月24日「『死せる魂』第六章まで訳了、二章で計約三万字」、7月4日「夜、『死せる魂』第七章を訳し始める」、7月27日「午後、『死せる魂』第八章までを訳了、前章までと計三万二千字、すぐ西諦に送る」、8月5日「『死せる魂』第九章を訳し始める」、7月28日「午前、『死せる魂』第十章まで訳了、二章で計約二万五千字」、9月16日「夜、『死せる魂』第十一章を訳し始める」、9月28日「夜、『死せる魂』第十一章を訳了、約二万二千字、これにて第一部を完了」、9月29日「夜、『死せる魂』第一部付録を訳し始める」、10月6日「夜、『死せる魂』第一部付録を訳了、約一万八千字」、10月17日「夜、『死せる魂』序」を訳了、約一万二千字」、10月20日「呉朗西に手紙と『死せる魂』序」の訳稿を送る」、10月24日「河清より手紙と『死せる魂』のゲラ、すぐ校正を始める」、10月25日「呉朗西に手紙と（『死せる魂』の）ゲラ」、10月29日「呉朗西より手紙と（『死せる魂』の）ゲラ」、10月30日「呉朗西より手紙と（『死せる魂』の）ゲラ」、10月31日「『死せる魂』第一部の校正を終わる」、1936年2月25日「『死せる魂』第二部を訳し始める」、3月25日「『死せる魂』第一章を訳了」、5月8日「夜、『死せる魂』第二部第三章を訳し始める」。第一部は上海文化生活出版社より1936年に出版されたが、第二部は彼の死により訳了できなかった。

魯迅の記録と蕭軍宛書簡の日付から見て、この校正刷りに関しては蕭軍の記憶の方が正しそうだ。

- 47) 魯迅は深夜に三時間ほどの仮眠を取った後、緑茶を飲んで再び机に向かったという（注3参照）。
 48) 許広平は、魯迅は食後に甘い物やビスケットなどを少し食べる習慣があったと書いている（『魯迅與海嬰』）が、このエピソードは多くの知人、友人によっても証明されている。

「魯迅先生がビスケットを一箱抱えてこられた。

『食事を済ませたばかりですから』と私。

『食事をしたらビスケットは食べられないのですか』と魯迅先生。だが孫さんとSさんはもうむしゃむしゃと食べ始めていた（曙天女士「訪魯迅先生——断片的回憶」1925、『魯迅回憶錄』）。そのほか注29参照。

- 49) 注1参照。
 50) 注47参照。
 51) 注43参照。
 52) 注29参照。
 53) 魯迅の日記に記されている「乍孫諾夫茶店（学研版で『サクソノフ茶店』と訳されている）」ではないだろうか。例えば1935年7月21日、許広平と海嬰を伴って「乍孫諾夫茶店」に行き、お茶を飲んでいり、同年8月20日にもそこで夕食をとっている。

蕭紅と蕭軍が初めて魯迅一家に会ったのも恐らくこの店だ。

「その日（1934年11月30日）、内山書店を出てから、我々は一定の距離を保ちながら魯迅先生の後について行った。東西を横に貫く大通りを渡り、道の南側の歩道を行き、更に西に少し行ったところで、喫茶店のような店に着いた。先生は慣れた様子でドアを開けて入って行かれ、我々も後に続いた。

頭のはげた、太った中背の外国人——恐らくロシア人——が親しげに魯迅先生に挨拶をした。先生はドアの近くの席を選ばれ、我々は腰を下ろした。その席はとても静かだった。ドアの近く、入っ

たすぐのところには小さな部屋があり、真っ直ぐ入って来るとこの脇の席には気が付かないからだ。椅子の背もたれはまた格別高く、隣の席に誰が座っているかは全く見えなかった。小さな家のようにだった。

恐らく我々が来たのが昼で、夜には間がある、すいた時間だったからだろう、このさほど大きくない店にはほとんど客は何人もいなかった。そして客の中に中国人は一人もいなかった。

魯迅先生が私に、この喫茶店は裏の『ダンスホール』で成り立っていて、昼間は誰も来ない——ことに中国人は来ないので、よくここを面会場所に選ぶのだと教えてくださった。

ウェ이터が三杯のコーヒーとお菓子などを置いて離れて行った。

蕭紅は許広平先生とお二人の間のお子さん——海嬰にどうしても会いたいと思っていたので、魯迅先生が口を開かれるのを待たずに、いきなり尋ねた。

『どうして、許先生はいらっしゃらないのですか』

『二人はすぐ来ますよ』、魯迅先生の言葉は浙江なまりのある共通語だった。我々には大体聞き取れたが、十分に理解できたとはいえなかった。蕭紅はびっくりしたような大きな目を見開いて、じつと魯迅先生を見ていた……ちょうどその時、海嬰が目の前に飛び出してきた。何か上海語を話しながら。我々を見ると走ってきた。続いて許広平先生が微笑みながら入って来られた。

魯迅先生が簡潔に、ゆっくりと、私たちを紹介された。

『こちらが劉先生（蕭軍の本名は劉鴻霖）、張先生（蕭紅の本名は張廼瑩）……こちらがmiss許……』

先生は私と蕭紅を指さし、それから許広平先生を指さされた。許先生は手を伸ばして我々の手を親しげに握られた。……この時私は蕭紅に注目していた。彼女は微笑みながら手を握ったが、涙が両方の目にあふれようとしていた」（『注釈』第八信注）

54) 魯迅は1909年8月に帰国、9月から杭州浙江両級師範学堂で教鞭を執っている。

55) この幽霊のエピソードを、蕭紅はその晩年、香港で無言劇「民族魂魯迅」（1940）に盛り込んでいる。